

6－5					
主題	個室の少ない従来型特別養護老人ホームの看取りケアを実施してきて				
副題	看取りケアの更なる質の向上を目指して				
キーワード 1	看取りケア	キーワード 2	なし	研究(実践)期間	36 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 三育ライフ 特別養護老人ホームシャローム東久留米
発表者(職種)	武田忠雄(看護課長)
共同研究(実践)者	鈴木さやか(相談課長)、鷹野尚子(介護課主任)、大西潔(看護課主任)、他

電 話	042-467-1561	F A X	042-467-3040
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	シャローム東久留米は、入所者 82 名、ショートステイ 10 名、計 92 名の方が利用される従来型の特別養護老人ホームである。また、平均要介護度は 4.14、平均年齢は、86.6 才である。看護課は常勤 4 名、非常勤 4 名、機能訓練指導員(柔道整復師) 1 名、看護助手 1 名の人員配置で、夜間は、オンコール対応をおこなっている。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

平成 18 年度の介護報酬改正以来、入所者の重度化、医療依存度の増大化にともない、施設に対する終の棲家としての期待が高まっていた。当施設でも、平成 15 年にターミナル委員会を立ち上げ、看取りケアに取り組んできた。ただ、看取りケアを始めるに当たり、未経験者も多かったため、暗中模索の中、他施設のやり方や文献等を参考にしながら、少しずつ改善し取り組んできた。ただ、経験値だけの判断や対応が多くあり、職員の中にも不安や不満、利用者や家族に対する配慮も、満足行く対応が常に出来ていたか疑問であった。医師との連携も全て満足行くものではなかったと思われた。そのような状況と課題があったため、改善が必要と考えた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

施設での看取りケアを初めて 10 年以上がたち、今までのケアや体制を振り返り、改めて見直すことで、「より、その人らしく」また、真似ではなく、当施設らしい、より良い看取りケアができるのではないかと考えたため、今回の研究に着手した。また、平成 27 年度に看取り介護加算に関する報酬改定が実施され、施設における看取り介護の質の向上のため、介護の体制の構築・強化を PDCA サイクルにより推進することが追加された。このことも踏まえ、改めて指針やマニュアルを見直し、ケアの内容を振り返り改善することで、看取りケアの質の向上につながることを目的とした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ・これまでの看取りケアの振り返りと課題の抽出と仮説の設定。
- ・看取りケアの流れの再確認と指針の改善・ケアの再チェック・3 年をかけ、改善に取り組んだ看取りケアを振り返り、看取り対象者の家族に対し、アンケート調査を実施。
- ・チームとして多職種が協力して取り組む体制をより強固にするため、情報の共有に務めた。

- ・医師との協力関係を継続していくため、対象者と家族の状況を報告。
- ・家族からの相談は、看護課長、相談課長、介護課長、フロア主任が対応し、いつでも相談を受けられる体制を作り、信頼関係の確立に努めた
- ・事例紹介(2例：①末期がんのかた、②食事拒否し、家族が判断を迷われた方の事例)
- ・グリーンケアについて

エンゼルケアの際、ご家族も清拭等参加して頂く。職員が、お別れの言葉を述べる。ターミナル委員会、フロア会議でも振り返りを行う。毎年3月には、亡くなられた方のご家族を施設に招待し、「偲ぶ会」を実施。

- ・病院との連携の維持と強化
- ・指針やマニュアルの見直しの実施
- ・教育や広報として、職員会や家族会での講義の実施

《4. 取り組みの結果》

- ・看取りの流れが整理され解りやすくなり、説明も行いやすくなった。
- ・看取りケアに対する理解が深まった。
- ・各課や嘱託医、また、病院との連携体制もより強くなったと考えられる。
- ・家族の理解が進み、信頼も深まった。

《5. 考察、まとめ》

今回、この研究の取り組みを通して、看取りについて、死を迎えるというよりも、最期まで生き抜くという捉え方をすることができ、その事をサポートできる仕事の素晴らしさ尊さを学ぶことができた。また、これまでの看取りケアを整理する事ができ、より良いケアの向上につながった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご家族に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・「平穏死」のすすめ：石飛幸三
- ・高齢者の end-of-life(エンド・オブ・ライフ)ケアガイド
岡田玲一郎 監訳 厚生科学研究所
- ・正しい看取りの意思確認：箕岡真子
株式会社 ワールドプランニング
- ・介護施設で「生きる」を支える看取り介護の実践 菊池雅洋 日総研 研修資料

《8. 提案と発信》

昨今、施設は入所者の重度化はさらに進み、医療依存度も高くなり、また、人材不足と厳しい状況である。そのようなぎりぎりの状況の中で、現場スタッフの献身的な対応と協力と使命感に支えられ、看取りケアの取り組みもできている。信頼関係を築き、チームワークで様々な厳しい場面を乗り越え、人生の最終章に携われる崇高な仕事である。マイナスイメージの強い業界ではあるが、このやりがいのある看取りケアの事も内外に発信し、理解してもらうことも必要である。さらに、より良いケア、その人らしいケアを進めていくためにも、待遇の改善や、配置人員の見直しも提案していかなければならない。希望を持って、看護や介護、福祉を目指した方たちが、誇りを持って継続して仕事ができる業界を構築するため、ケアの事だけでなく強く発信していかなければならないと思う。